



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The Eternal Pursuit of Arbitrary God : Melville's Method of Provoking Immortality [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	鈴木, 一生
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13837号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78692
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Issei_Suzuki_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：鈴木 一生

学位論文題名

The Eternal Pursuit of Arbitrary God: Melville's Method of Provoking Immortality

（終わりになき恣意的な神の追跡：メルヴィルによる永遠性の呼び起こし）

・本論文の観点と方法

本論文は、19 世紀アメリカ文学を代表する作家のハーマン・メルヴィルの諸作品を取り上げ、メルヴィルの創作活動を彼の宗教観あるいは当時の思想・文化背景を手がかりにすると同時に、複数の作品に共通して現れるテキスト上のパターンを読み解きながら、その文学的特質を明らかにする試みである。これまでの研究においては、メルヴィルが厳格なカルヴィニズムの影響下で育ったことから、神の計画を尊重する運命論と人間の自由意志の間で葛藤し、最終的には運命論に反発する立場に至った可能性が度々論じられてきた。本論文では、こうした作者自身の葛藤が、とりわけ作品中に度々出現する分身のテーマに反映されていると主張し、その頻出するテーマが個々の作品において、いかに発展していくかを考察している。

方法としては、作品内で使用されている単語や表現の精査などを含む、作品の精読という伝統的な手法をとりながら、反復、反転、並行関係といった作品構造、あるいは描写の矛盾や欠落などに関するいくつかの独自の考察に基づき、最終的にはメルヴィルの作品群における中心的主題を解明することを目指している。その際、これまでの研究においてなされてきた、宗教・思想などの文化的背景に関する議論も十分参照することで、メルヴィル作品の芸術的価値を総合的な観点から批評・評価している。

・本論文の内容

4 章構成の本論文は、カルヴィニズムに影響されたメルヴィル作品において頻出する分身とは、ある人物の自由意志とは別に、予定論的に既に定められた自己の姿であることを明らかにし、個々の作品分析を通して、作家の創作活動とは、その分身と一致しないよう、いわば常に一步遅れることによって、神の意志を追いかけつつも、その独立を保つことを目指したものであったと結論する。

第 1 章では、中編 “Benito Cereno” において、「汝の先導者に従え」との言葉が、同作品を駆動するスローガンとなる謎を解くために、同時期に執筆された 3 つの短編（“The Lightning-Rod Man,” “The Happy Failure,” “The Bell-Tower”）を横断的に読解する。まず、上記の作品群において、ある登場人物自身と分身との関係が、追う者と追われる者とし

で一貫して描かれることを主張する。さらに、分身に預言者としての役割が共通して付与される点を指摘し、メルヴィルが描く分身には、神意によって予め定められた自己が体現されていると論じる。このように、一人物において神意と自由意志に従う自己が分裂し、**leader-follower** の関係性を形成する点を各作品において精査した上で、メルヴィルが、神意と自由意志の一致を禁じている、とする。なぜなら、各作品において、**leader** としての分身と **follower** としての自己が一致するときに死が訪れるパターンが、繰り返し観察されるからである。本章では、こうした運命論的な発想が反映された分身の描写について分析することで、メルヴィルが、カルヴィニズム思想に反発を覚えながらも、同時に自由意志が神意に逆らうことの不可能性を理解していたと結論付ける。しかし、メルヴィルはこのような神と人間の間決まて悲観的に捉えていたわけではない。むしろ、一人物の内部における自由意志と神意の分裂にこそ、自己理解への手掛かりがあると考え、意識的に自分と分身の不一致を描き続けたのである。それゆえ、永遠に **follower** であること、神という先導者に従い続け、決して両者を一致させないことが、“Benito Cereno” における登場人物の、ひいては、作者メルヴィル自身の創作活動にとってのスローガンとなるのである。

第2章は、主に短編 “Bartleby” と長編 *Moby-Dick* を扱い、メルヴィル作品における、分身の描写と時間の主題の関連について考察する。一人物の内部における神意と自由意志の分裂が、分身関係として現れることを論じた第1章の内容を踏まえ、本章では、メルヴィルが、予定された物事の先延ばしを繰り返し描くことを指摘する。その上で、そうした予定の先延ばしによって生じる遅延が、究極的には、自分自身と神の間に生じる遅れである、とする。すなわち、この遅延は解消されてはならない遅延であり、予定の実行を完了させないことが、神と人間の間決まて重要であるとメルヴィルは考えたのである。さらに、「先延ばし」のテーマを、メルヴィルがウィリアム・シェイクスピアの『ハムレット』から着想した可能性を指摘する。『ハムレット』では、主人公ハムレットが、父を殺した伯父クローディアスへの復讐を延期し続けることが、同作品の謎の一つであるとされてきた。この謎に関して、メルヴィルは、とりわけ *Moby-Dick* において、エイハブ船長率いるピークオド号の船員たちによる白鯨殺しが必要以上に先延ばしされるなど、予定の完了を先延ばし続ける現象を繰り返し描くことで、一つの答えとした。ただし、ハムレットが自分の分身ともいえるクローディアスを殺し、自らも死ぬのに対し、*Moby-Dick* のイシュメールは、自己の分身としての白鯨が殺された後も一人生き残り、語り手として再度この捕鯨譚を語り始める点で、両作品の結末は異なっている。すなわち、ハムレットは、分身（クローディアス）との一致を成し遂げるが、イシュメールは生き残ることにより、分身（白鯨）との一致を回避し、さらに一連の物語を語り直すことで、物語に円環構造をもたらし、語りの終着点さえも回避する。こうして、メルヴィルにとって永遠の「先延ばし」が、神と人間との関係において積極的な意味合いを持つことを確認する。

第3章は、「二つ折り絵」と称されてきた、前半部と後半部に主題的な対照性が見られる短編作品について検討する。なかでも、“The Two Temples” と “Poor Man’s Pudding and

Rich Man's Crumbs”を扱い、両作品の合わせ鏡的な物語構造を分析することで、鏡像関係が分身の主題の一変奏であることを明らかにする。まず、“The Two Temples”において、同作品中に描かれる執筆当時の文化背景を踏まえ、本来は一对で描かれなければならない物事が、一方しか描かれない点に着目する。そして、描かれる一方が、描かれない他方の投影として機能していることを考察する。また“The Two Temples”の前半部は「生の世界」として、後半部は「死の世界」として描かれている。前者は、いわば自由意志が通用する世界であり、後者は神意に支配される世界である。だが両者は、鏡の前の物体と左右が反転した鏡像の関係にあって、決して一致することはないものの、同時にお互いを映し出すことによって、生の中に存在する死、あるいは、死の中に存在する生のように、相反する状態を現出する契機ともなり得ている。また、“Poor Man's Pudding and Rich Man's Crumbs”に関する分析では、富める者から貧しき者へのチャリティーが失敗に終わる一方で、貧者から富める者への逆転した「チャリティー」が描かれていると論じる。その上で、このような逆転したチャリティーでは、“The Two Temples”の議論を踏まえ、生と死の二重性のなかにしか現れ得ない真実であるとする。メルヴィルは、自由意志に価値が置かれるこの世と、人間の意思では捉えきれないあの世との不一致を、「二つ折り絵」構造を用いて巧みに捉えたのであり、両者の間にしか浮かび上がることのない真実を描こうと試みた、と結論する。

第4章は、家庭小説としてカテゴライズされてきたメルヴィル作品のうち、“The Apple-Tree Table”と“I and My Chimney”について論じる。前者の作品に関しては、本来一つの流れであるはずの時間が、複数の流れに分離していることに注目する。たとえば、予定されている未来に現在が決して到達することがないような、先延ばしされ続ける時間感覚が描かれるのである。後者の作品に関しては、作中で仄めかされる秘密の小部屋の謎について議論する。同作品では、登場人物が目的地を通り過ぎてしまったり、迂回を繰り返してなかなか到達できない様子が繰り返し描かれるが、秘密の小部屋についても、最後まで明確な解答が提示されることはなく、謎を提示された読者は、目的地に到達できない感覚を、作中人物たちと共有することになる。こうして、作者だけが持ちうる想定される「知」に、読者や登場人物が絶対に到達することができないという仕掛けが、人間と神の関係の縮図であることが明らかにされる。

結論部では、本論文における議論を文学史的に位置づけることで、アメリカ文学研究史における本論文の意義を確認している。アメリカ文学におけるロマンス性の特徴が「矛盾」や「不一致」にあることを Richard Chase らの研究を参照しつつ確認した上で、メルヴィル作品にみられるロマンス性について改めて要約し、アメリカン・ルネサンス期の他作家の作品との関連性についての議論への展望を示し、結びとする。